

## 巨大腹腔内デスモイド腫瘍の一例

下江裕二、時岡聡、瀧谷真隆、高山祥子、三戸岡英晃、森川和哉、菊谷聡、  
金岡秀晃、榎林賢、能田貞治  
( 第一東和会病院 消化器内科 )

【症例】30歳代、男性

【現病歴】3ヶ月前から腹部膨満感を自覚していたが、症状強くなり、内科外来受診となった。

【経過】単純CTで腹部に巨大腫瘍を認めた。造影CT検査で造影効果の乏しい腫瘍を認め、MRI検査ではT1強調画像で低信号、T2強調画像で低からやや高信号が混在する境界明瞭な腹腔内腫瘍を認めた。診断目的に針生検施行したが、紡錘形細胞の増殖からなる腫瘍性病変で確定診断は得られず、増大傾向、腹部膨満症状から、腫瘍摘出術を施行した。腫瘍は横行結腸とICA分岐部近傍の腸管膜に広範囲に浸潤を認め、SMA、SMVに癒着を認め血管との剥離は困難であり、腸管膜に残存していた。摘出標本は重量11kgであった。病理所見は、紡錘形細胞から成る腫瘍で、核異型は目立たず、免疫染色は、 $\beta$ -カテニン陽性、c-kit陰性、CDK4陰性、MDM2陰性であった。以上よりデスモイド腫瘍と診断した。

【考察】デスモイド腫瘍は頻度の低い腫瘍で、腹壁に発生するものが最も多く、腹腔内発生は稀とされている。完全切除後でも再発率が高いという報告があり今後も慎重な経過観察が必要と考えられた。本疾患は手術、外傷などの既往歴や家族性大腸腺腫症に合併することが知られている。今回これらの既往のない成人男性に発生した巨大なデスモイド腫瘍を経験したので報告する。